

なっている。しかし考えてみようではないか。認識という行為、経験という行為、これらの行為を私達が阻却したなら、時は在るだろうか。こんな事を漠然と行なっているのだろうか。

時は単に表象として在るのではなく連続して一つの物として事象を形成するのだ。それは物の認識、行為に付属した物として事象という物を作る物として在るのだ。

このような認識の仕方から私達は一つの自由に対する斗争を弁証法的に導くことができるだろう。

時が在る、物も在る。物の行為は時に付随しているのだろうか、時は物の行為の結果在るのだろうか。時が在る。物が在るがゆえに時が在るのだろうか、物は時とは関係なく在るのだろうか。物は………

「我」と「有」と「無」について

——アナキズムについでのある提案——

周知のとおり、デカルトのあまりにも有名な言葉に、
《我おもう故に我あり》というのがある。僕の手元にはいま『方法叙説』がないので、彼がどういう文脈でこの言葉を使ったか、を具体的に省察することはできないけ

物は在るのだろうか。これに対する解答は唯物論をもつてしても、自己演繹的弁証法的に解いたとしても解ききれない。ただ、この解答ではなく、この文の結論を恣意的に次の様に書ける。

時が在る、物も在る、と私は書いてきた。私は自己演繹的弁証法的にこの論理の物という所を私と入れ変えることができる。

時が在る、私も在る、私の行為は時に付随しているのだろうか、時は私の行為の結果在るのだろうか。

時すら主体的に自己同化しようとして捕え、自己の自由のため、あえて敵するなら斗かおうとする姿勢、それこそがドン・キホーテ的であろうとも私達の姿ではないか。

菅 輝 生

れども、僕の記憶が正確ならば、たぶん神の存在を証明するために使われたのではなかったかとおもう。

僕の考えでは、《我おもう故に我あり》というのは、あまりにもヨーロッパ的な思维であるとおもう。そして

近代合理主義の祖たるデカルトもまたイスラエルにその源を発する宗教的思想に影響されていたようにおもえる。

というのは、もし僕たち東洋人が神の存在について《我》との関係から省察するならば、恐らく僕らは考えたすえにはあるけれども、《我おもう故に我なし》と言いつけるはずであるからだ。

僕たちはここで東洋と西洋の思维の相違に出会うわけだが、それはともあれ、この場合《我》とはいいたい何人であるか。

デカルトの《我》とは、近代的思维の所産としての《自我》である。この《我》は歴史的にみれば、資本主義の萌芽期における資本主義の精神である。つまり、デカルトの《我おもう故に我あり》とは、《我おもうから宇宙が存在しそれ故に我もまた存在する》、いかえれば《我があるからこそ、我は宇宙を創造することもできるし、それを手中にすることもできるのだ》という資本主義的精神の表明であった。

デカルトの《我》には、たしかにこのような思维があったとおもわれるが、『方法叙説』の中のデカルトは、この言葉で神の存在を証明していた。つまり、《我おもう故に我あり》という資本主義の精神を実践すれば、神は《我》を加護したまう、と。

この意味では、デカルトの《我》には、たしかに西洋的な宗教思想の痕跡がある。すなわち、デカルトのふたつの《我》は自我としての《我》であるが、《我おもう》の《我》には本来の《我》、いかえれば唯一絶対創造神である神しか発することのできぬ《我》という意味がある。

僕は哲学者でもキリスト者でもないから、この場合の《我》をもっと詳細に省察することはできぬが、今まで述べてきたように、デカルトの《我》には、人間が神の位地まで昇格、あるいは神が人間の位地にまでひきずり降された位相がある。

それはともかくとして、僕たち東洋人には、このような意味での《我》は存在しない。というのは、東洋の神々は仏教も含めて、キリストの神や回教の神とはちがひ、宇宙を創造することのない、多神の自然神であるからである。つまり、たとえ東洋の神々が《我おもう》といったとしても、その《我》とは人間のようにうつろいやすいものであり、したがって《我おもう》がそのまま《故に我あり》に直結しないのである。とくに、僕たち東洋人は多かれ少なかれ《無》の境地に深いあこがれを抱いているから、《我おもう》と省察していくうちに《我なし》といわざるを得なくなっていくのである。

己れの個人的な立場からいえば、《我》もう故に我なし《》の方にこそ深い宗教的境地があるとおもうが、諸士はどのようにお考えだろうか。

ところで、アナキスト（僕も含めてか）のなかには、マルティン・ブーバーの《我》と《汝》の対話理論に立脚している人も多いらしい。マルティン・ブーバーのこの方え方には彼の深い宗教的境地がみられるが、それはさておき、僕の《我》と《汝》に対する理解はといえば、《我》の内なる神性としての《汝》に語りかけることによって、神は逆に《我》に向って《汝よ》と呼びかけてくる、ということである。つまりこの思考は、やはり

女性解放の悲劇

エマ・ゴールドマンとルイズ・ミッシュェルとはアナリズムの歴史上、もつともすぐれた女性である。二人とも「女」の名に価する者はこの二人だけだと言っても良い位の女性である。しかし、この本を通読して、何故、「女性解放の悲劇」などと、エマの一文の題目をつけたのかと文句が言いたくなる本だ。もちろん、最初に「わが生涯を生きる」があり、表題のものを含むエッセイが

西洋の思惟、すなわち《我》が《有》る、ということをも前提として成立しているのである。

僕が西欧派のアナキズムの思想にすっかりしないのは、じつは、これに由来する。彼らはアナキストとして《絶対》を否定するが、絶対者としての《我》の存在を無意識ではあるが前提としているから、僕にいわせれば、《さかしら》となる。僕は己れの発想をまだ十分に展開することができないが、《我》もう故に我なし《》といった東洋流の思惟から発出するアナキズム思想が（も！）必要だと考えている。

一九七三・八・五

エマ・ゴールドマン著 はしもと・よしはる訳

ある。しかし、終の二章となっている「ロシア革命の印象」と「裏切られた革命」こそは、生涯を主義に捧げたエマの純な心と、鋭い知性が触れた印象と分析として、革命は如何にあるべきかを考えさせるものである。クロボトキンの晩年とその死を書いたものなど、クロボトキンが、戦時中誤りを犯したにもせよ、最後までアカルシストとして生き抜いた崇敬ささえも感じさせる。

アメリカから追放されて革命進行中のロシアに入ったアレクサンダー・バークマンとエマは、すでにレーニンの計画通りに着々と進行している権力革命のもとに、アナリストもサンジカリストも投獄されており、何一つすることもできず、その眼前でクロンシュタットも圧殺されてしまった。（バークマンについてはリベルテール第40号の野火の中で少しばかり紹介した）。

裏切られた革命の中でエマが指摘していることは、マルクスが、革命は工業化の進んだ所に起ると考えたことを口実にして、ロシア革命は工業化されていない後進地で起ったのだから、これから工業化し、アメリカに追いつき追いついて社会主義社会に入るのだという口実で国家資本主義に進んだことである。この見方は正しい。私もいつも言っていることだ。革命は現実の悪から抜け出して新しい社会に踏みこむことで、工業化を待たねばできないことではない。機構に引きずられて善光寺参りをするのでなくて、私たちが私自身を変え、社会機構を変える人間の問題だ。決して牛の問題ではない。兎が木の株に打つつかって死ぬのを待つのではないのだ。レーニンのような狡猾な政治家は弁証法的必然の法則で、と諸君に思いこませるので、そんな手に乗ってペテン師の政治家の理論にかつがれると、トロツキー張りの永久革命

にも乗ってしまったのだ。アナリストの革命はそんな生やさしいものではないのだ。世界中の航空機を、すべてハイジャックしても、そこに有るものを泥棒するだけで、泥棒権力者にだまされる民衆がどうなるというのだ。

革命とは泥棒根性をもった資本家や政治家がしがみついている国家や権力の消滅を目指すもの、そうした権力の下で奴隷化され、機械化された人間が、まともな人間になることではない。

革命はエマが言うように価値転換なのだ。価値転換ということは、目的に対して正当な手段をとるということである。目的が良ければ手段はどうでもというように詭弁を許さない馬鹿正直の道に帰るということだ。人間の倫理が考えられることだ。外面的な革命を考えるのは成り上り根性でしかない。内面的に貪欲な人間が、いくら外面をかざしても、猿がタキシードを着ているようなものではないか。権力主義革命理論は猿の革命理論であって人間のものではないのだ。エマが教えるのはこのことである。

またエマがサーシャと共にレーニンに会いに行ったときのことを書いている。レーニンは厳重な警戒の奥深い所、クレムリンの宮殿の奥にいて執務していたことが、淡々と述べてある。権力をとるということ、これは主権

者になるということ、一般人から隔絶した雲の上から命令を出すことだということが分る。戦後の日本の天皇以上に非人間的である。革命とはこんな主権者をつくることだろうか。それでいて人民主権なのだ。主権を委任して独裁してもらうのが民主主義として常識になっている世界では、ニクソンが盗聴は歴代大統領が皆やっていると言う言訳も通るのだ。政敵金大中も殺さねばなるまい。殺さなかったとしても、すでにその生命が手中にあることを示している。死の脅迫だ。金大中が政権にありついても同じ警察力を行使して同じことをやるだろう。クリスチャン大統領李承晩もその政敵を殺していることは周知の通りだ。人民が委任した主権とは、そんなものだろうか。人民はそんな主権者なのか。僕等はそんな主権者ではない。僕等に在るものは一個の誤り易い、罪に満ち、矛盾だらけの自己だ。これがスチルナーの言う唯一者なのだ。一本の葦、考える葦、それに無限の愛着をもってこの唯一者を抱きしめて、やがてこの地上を去ってゆくのだ。頼まれたところで、頼んだところで、この宿命をどうすることができよう。革命とは宿命を破ることから

野 火

フロレンス、七月28日 前田

出発するほどの一つの葦がもつ、ひとつの意識、ひとつの愛、ひとつの意志が人間の宿命に転機をあたえ、価値転換をさせる。これが私共の出発点で、持ちもしない主権に自惚れて民主主義などとホザいたことからではない。一人の女エマは、一人の男サーシャを愛し抜いた。愛するが故に自己を犠牲にもした。それは下積みの階級の憤激を爆発させ、解放への叫びをあげる途上のものであった。だが、その途を二人は歩き続けたのだ。冷たい打算による権力主義者の言う革命の方が、はるかに実現しやすいかも知れない。人間は一つの有機物質として犬や猫とも変らないものでもあるからだ。コンピュータにも乗る動物だからだ。コンピュータにのせたつもりでも、のらないものを持つのが人間なのだ。先刻言った宿命を破る者なのだ。

エマとサーシャがレーニンと分かれたのはここからである。アナルシストがマルクス主義者や資本主義者と分れるのもここからだ。人間のフュシスから一歩出て、人間のノモスを批判する。人間は考える葦だ。だからアナルシストだ。(イデア出版、定価七五〇円―三浦)

シャトー・デュ・ロワールの会合はたいしたことなか

った。ローザンヌORRAで一泊、京大アナ研のミキ・ヒデアキ君に会いました。

二人のシシリアの同志フランコ・レジョとアルフレド・ボナンノと共にイタリアを南下中、ミラノ、ピストリア、フロレンスのグループ、オルガニザションと交歓、イタリアでは活潑な運動が展開されている。若い人が非常に多い。これからピサに向い、後シシリーに直行します。帰路アンコーナ、トリノ等に立寄る予定。

(同行の平山フサコ、平山タタカ、フランコ・アレジョヨの署名がある。三浦)

×

草の中から・近藤真柄

素面第49号、一九七三・八月号に、大杉栄、伊藤野枝と共に殺された橘宗一少年の墓について書いて居られる。発見された西本令子さんは「宗一」という文字が目に入ったとときの衝撃は今でも忘れません。そして碑の表にまわって草をかきわけ、かきわけ、「愛に生くべし」という文章を読んだ時の体をつき抜けるような感動を自分一人だけのものにしておくことができなくて「ひととき」に投稿したのです」と語られたとのこと。墓参された真柄さんは墓碑の文字を書いておられる。

吾人は須らく愛に生くべし、

愛は神なればなり、橘宗一をして、その上部には英語でM・橘、一九一七年四月十二日米国オレゴン州ポートランドで生れた。

裏には上に

宗一(八歳)ハ、再渡日中、東京大震災ノサイ、大正十二年(一九二三)九月十六日夜、大杉栄、野枝ト共ニ犬共に虐殺サル。(英文・一九二七年四月二十七日建て、S・橘)

下段に

なでし子を 夜半の嵐に た折られて あやめもわかぬものとなりけり 橘 惣三郎

墓所は名古屋千種区法王町、覚王山日泰寺 (三浦)

×

杉藤二郎君から、八月二十四日付

・・ワタシ ワ マイニチ タイクツ ナノデム
スメ ガ カッテ クレタ コノ タイプ デ キオク
オトリモドス シュダン ト シテ アンソンド イマ
ス・・ドンナニ キオツケテ ウッテモ ミス バカリ
リデ イチマイ ウツノニ 一ジカン モ カカリ メ
モ イタク ナル・・とカナモジタイプの手紙がきた。
「トンちゃん」という二篇の随筆が同封してある。この二篇は本号に出せなかつたら、次号に出すことにする。

カナで出したいのだが、そうも行かないだろうから書き直して出すことにする。私は以前から漢字廃止に賛成している。漢字廃止によって、日本語が新しい進化をとげると思うからだ。老境に入って、小さな活字の複雑な字面は、虫めがねをつかわねば分らなくなった。杉藤君のカナモシの手紙を見ると、救われたような気持ちになる。

漢字廃止に賛成しながら、なぜ漢字を使うかと言われるだろうが、「それは妥協すべきだからだ」と答えている。アナリストでありながら、この資本主義の社会に生きていること自体が妥協によるものだ。もし純正アナリストと称したかったら、自殺以外に道がないのが、この社会だ。死んでしまつたら、もう学ぶこともできないし、思想を確立させ、伝えることも一切不可能だ。中途半端なもの、不純なもの、一切を包容して悠久から悠久へ流れるのが、この社会ではないか。この社会の中の人間と、人間の在り方、在るべき姿を考えるのがアナリズムではないか。妥協して生きながら、妥協のない世界を考えているのだ。(三浦)

×

清水修一君から

お元気ですか、先日河合君が面会に来てくれましたが三浦さんはアルバイトをやっているそうですね。

ところで前回の手紙で「暴力」≠「権力」ではない等と変なことを書きましたが、あれは撤回します。暴力はむしろ全て権力です。しかしたとえ「非」暴力であってもそれが「闘争」である限り権力です。ですから暴力的な闘争のみを「権力」として批判するのは誤りだと思えます。あらゆる権力を否定(もちろん方法論として)するということは「闘争」をも否定することにはなりません。私は暴力も権力も認めます。当然「過渡期」も認めます。(先日、会津の瓜生さんから「らじかる」送っていただきましたが、その中に西塔さんの「過渡期批判」がのっていましたね。

それはさておき、最近、台湾の林景明氏に関する文がのっていますが、私は(在日)台湾人、朝鮮人等、そしてアイヌの問題は「日本」という国家そのものに関わる重要な問題であり、日本国家総体を突きくずす急所であると考えます。私たちは彼らの視点に立つことなしに日本そのものを滅ぼすことはできないし、特にアイヌ問題を考察することは非常に重要であり、アイヌ・モシリ(人間の国)の視点に立つことによって、はじめて私たちは日本の滅亡を理解することができると考えます。現在アイヌ問題は例の爆破事件をきっかけに「差別」という形で(もち論「差別」等は本質的な問題ではない)注目

されています。そして権力はいつになく親切に(といってもたかが知れている)保護・福祉という形でインペイしようとしています。なぜ「親切」なのかというと、アイヌは一応日本国民であり、中国人、台湾人、朝鮮人に対するようにロコツに「外国人」として切りすてるわけには行かないからです。けれどもこの「外国人」(元日本人)に対する差別、切りすてとアイヌに対する保護(北海道旧土人保護法による)とは本質的には同じであり単なるメダルのうらおもてにすぎません。しかも権力のアイヌに対する保護「同和」政策とは、その本質はアイヌの日本人化による「アイヌ民族絶滅政策」に他なりません。日本共産党などは問題を「反差別」にワイ小化することによって、この絶滅政策に手をかしています。もつともアイヌがいなくなれば「差別」もなくなるでしょうが、とにかく私たちはこの問題を無視すべきではないと考えます、七三・八・二四。

一人で考える清水君に、どうか読者諸君から、この手紙に対する返事を書いて欲しい。僕ももちろん書く。

暴力と非暴力の問題については、僕は僕の対度としてとりたいと思っていることである。というのはどこからが暴力で、どこからが非暴力と線を引くことのできないものだからだ。暴力の前でイザとなって非暴力をつらぬ

けるほど強い僕であるかどうかさえ言えない。つらぬきたいと思う。しかし大言壮語はひかえる。僕は僕の弱さを知っているから。僕が非暴力を言うのは、それによって暴力に抵抗し抜きたいと思うので、屈服の口実となる非暴力ではない。

林景明氏を囲む会は、カラフト抑留朝鮮人四万人のために立ち上っている。アイヌの問題もわれわれの問題である。日本人の同情に期待しようとせず、アイヌ自身がアイヌ・モシリのために立ち上って欲しい。(三浦)

×

パリ・8月25日、平山、前田、グラシア。

パリでグラシア夫妻にめぐり合い、今彼の娘さんのようにつきあっている人の家でおしゃべりしています。元気で多くのカマラードと毎日あっています。「平山忠敬(房子)」。イタリアの旅行を終え、いまパリにいます、こちらの様子について後便でお知らせします(前田幸良)三浦君・日本からの君の良い仲間たちに会う機会をえて本当に嬉しく思っている。ではまた。グラシア。

グラシア君は少年の日スペイン革命に参加負傷し、今ヴェネツエラで革命運動を続けている。前に日本に来たこともある。(三浦)

◎「大逆事件の真実を明らかにする会」の仕事のほかは鳴りをひそめていると思つた遠藤だが、先年山梨で久々に会つたら、宮下太吉の建碑、その運動を拡大しての県文化人会議、富士地区労の福田武寿や忍草母の会との連帯活動等さかんに動きまわっていた。その遠藤が全山梨文化人会議を結成し月刊紙「連帯」を発行した。連峰スカイライン建設反対共闘、北富士演習場解放斗争、金子ふみ子特集等40号は鮮烈な印象を与える編集である。

◎京都アナ研は機関紙3号「黒光」を発行。トップに、「全国の同志へ！共同斗争体制構築↓アナキスト連盟再建へ向けて、大杉栄追悼五〇周年集会を各地で組織せよ」と訴えている。実行委が七月に結成された由。

◎福島地区労組活動者会議が結成され活潑な運動を展開している。「労活ニュース」一部千共30円を読もう（福島郵便局私書箱金円和号）なお第六回福島全県青年労働者討論集会」を六月九〜十日福島市で開催、青年労働者と農民三〇名が結集した。各地区各職場の活動報告に続き、①賃金②組合民主主義③春闘のくみ方④4・27ゼネストの教訓に付て全体討論。小分科会では①賃金②反合時短、労働条件③職業病、労災④農民のテーマで討論が行われた。「労働戦線の右傾、官僚主義的運動の中で、いかに戦斗的労働運動、地区運動を作り出すか」と強い

斗志で結ばれている。同志新明をはじめ同地の諸君の健闘を心からたたえらるものである。

◎九州エス連盟で共訳を進めていたナガサキの「原爆読本」の初級用「雲になつてきえた」が刊行された。全世界の新しい世代に訴えたいという。（以上ハギシン）

リベルテール 一部 100円

Le Libertaire 毎月一回15日発行

昭和48年9月15日発行 Vo. N No10

編集兼発行者 三 浦 精 一

発行所 東京都練馬区大泉学園町2190

萩原晋太郎方

リベルテールの会

(振替東京133830番 三浦精一)